

令和元（2019）年度 第2回「やまの健康」推進懇話会
議事要録<要約版>

- 日 時：令和元（2019）年9月4日（水） 10：00～12：00
○場 所：滋賀県庁舎本館 4-A会議室（滋賀県大津市京町四丁目1-1）
○参加者：<委員>藤山座長、清水委員、鶴飼委員、藤岡委員
<滋賀県>石河部長、廣瀬課長、櫻本主幹、田中主査

（1）開会

（2）懇話会について（全3回の進行イメージと第1回のふりかえり）

（一社）コミュニケーションデザイン機構（別紙1、第1回懇話会議事録<概要版>参照）

第1回懇話会では、全体について委員の専門性を踏まえた留意点・着眼点や、重要なキーワードを相互に提案した。第2回懇話会では、都市・湖畔で暮らす県民がどのように「やまの健康」推進事業に関わってくるか、また、都市から見た「やま」の価値を引き出すということをひとつの切り口として、県内外の人の巻き込みをイメージした意見交換を行う。第3回懇話会では、「やま」で暮らす県民に焦点を当てて意見交換を行う。

（3）（仮）「やまの健康」構想の骨格修正案について

（一社）コミュニケーションデザイン機構（別紙2、参考資料1、（仮）「やまの健康」構想の骨格参照）

8～10ページ程度の冊子状に取りまとめるイメージ。「構想」を分かりやすい言葉で言い換えることも想定。具体的な中身として、「0. 知事のメッセージ」の後、「1. はじめに」では、本事業が必要とされる地域課題や背景を示し、やまの人や都市部・県外の人がどのようにこの構想に関わるかを説明し、生活の場やライフステージなど、それぞれの立場に応じてイメージできる内容となるようにする。「2. 構想骨格案」では、やまで暮らす県民の視線を中心に、都市・湖畔で暮らす県民の立場からの参加も意識して記載する。「3. モデル地域・モデル事例の取組状況」では、採択された2地域についての取組の紹介と、モデル事例として20～30歳代女性へのアプローチの紹介を検討している。

参考資料1がカルテの例示で、地域の様々な課題を要約して皆が共有できることが大切ではないかという趣旨である。裏面には、県民のライフステージごとの「やまの健康」との関わりとして、県内の30歳代の様々な層の女性に、この事業がどのように関わっていけるのかを例示したものである。

◆「構想」の名称について

委員：琵琶湖の「マザーレイク」に対して「ファザーフォレスト」として、お父さんは病んでいることを訴えられないか。

委員：やまは「マザーレイク」を生み出しているのだから、「グランドマザー」という考え方もできるのではないかと。おばあちゃんは弱っているといったイメージである。

委員：県民は「マザーレイク」という言葉はよく聞いているので、「ファザーフォレスト」は響くのではないかと。「ファザーフォレスト」が言葉として定着すれば、やまと湖の関係性をもっと身近に感じてもらえるのではないかと。

◆取組の単位について

委員：小学校区・中学校区が考えられるだろう。小学校区だと少し小さいように思う。

委員：各地の森林組合がもつテリトリーなども考えられるのではないかと。森林組合では、広さに対する人員や、やまの状況によって管理のしやすさなどが異なるので、比較がしやすい。県民にとっては、森林組合は身近な存在ではあるものの直接の接点が少ないということはある。

座長：学区と森林管理の単位の2つを重ねてみるとどうなるかを事務局で調べてみていただきたい。そのうえで単位をどのように設定するかを詰めてはどうか。

委員：学校区も人数一律で区切るよりは、多様であってよいのではないかと。

◆カルテについて

座長：水源涵養の力を示すことができればよい。

委員：職人の数が激減している。製材所の数は県下でもかなり減っている。

座長：「人材・体制」で、少し膨らみをもたせて、広い意味でやまに関わる人の情報があるとよい。インターネットで地図と連動させた運用が实际的であると思う。

委員：「生活環境」については主観的なものを含むため、客観的なデータで示せるような再検討があってもよいのではないかと。

(4) 話題提供①「パラダイム転換期における滋賀県のやまの価値の活かし方」

＜鶴飼 修 委員（滋賀県立大学地域共生センター 准教授）＞

パラダイム転換期において、暮らし方や生き方などもこれまでとは違った形になるのではないかと、いうことを念頭に置きつつ、滋賀のやまの本質的な価値は何かということを中心に捉え、既存の価値観や考えではなく、新しい発想、イノベーションが必要ではないかとの提案と共に、具体的な「地域診断法」の取組手法や事例、「コミュニティ・ビジネス」の事例などについて話題提供。

(5) 話題提供②「産地と消費地のつなぎ方ー持続可能な農山村の確立を目指してー」

＜藤岡 章子 委員（龍谷大学経営学部 教授）＞

社会課題をマーケティングの考え方や方法を転用することで解決を図っていこうという考えのもと、様々に取り組んできたプロジェクトのなかからいくつかを例に紹介しながら、「複数の取り組みを連動させる」「取り組む主体の関与をじっくり高める」「プロジェクトの「関係者」を増やす」の3つについて、「AIDMAモデル」「単純接触効果」の2つのキーワードと共に話題提供。

(6) 「やまの健康」モデル地域の決定と取組説明

＜滋賀県琵琶湖環境部森林政策課（やまの健康推進係）主幹兼係長 櫻本 直樹＞

今年度は、大津市葛川地域と、米原市伊吹地域の2地域を選定。大津市葛川地域では、リンドウをひとつの起爆剤とした地域振興の取組や、京都に近い立地の優位性を活かして都市の方を対象に葛川を楽しんでいただく取組を計画されている。米原市伊吹地域では、大きく3つのエリアで活動の軸がある。ミョウガや山椒、山菜の栽培・加工といった地域資源を活かした特産品や広葉樹の炭焼き。都市住民向けの地元食の提供や森林を活用したセラピーなどのサービスの提供、マウンテンバイクロードの整備、ドローンを活用した取組、地域を拠点とした木材の商品化などの提案など、森林資源を最大限に利用した取組。伊吹地域に昔からある菓草のブランドを復活させる計画など、本事業での取組を通じて、これら3つの取組を連携させて、更なる相乗効果を図っていききたいと模索されている。

(7) 意見交換＜進行：藤山座長＞

○委員からの話題提供を踏まえ、現時点の「やまの健康」構想素案に落とし込む形で意見交換。

委員：若い人たちが元気に活躍できるような仕組みを提案できればよい。モデル地域の取組をどのように変革していくかを考えることが必要ではないか。藤岡委員の取組のような、若い人たちへの対応をどうするかといったエッセンスが欠けていると思うので、次の時代に合うような「やまの健康」の構想が描けるとよい。消費者が何かを購入したときに、やまに木が1本植えられて、それがやがて積み木になって返ってくるということをするれば、何もしていないつもりであったが、実はやまに木を植えていたということになるのではないか。

委員：山間部では空き家の問題とやまの問題が直結している。職人の技術をどうやって保存するかということは、やまの問題とも大きく関わっている。若い人たちは、職人が作業をしている姿に憧れを抱いたりしている。「かっこいい」というのも、ある種のキーワードではないか。例えば1日、または週末だけ田舎に住んで、空き家を改修しながら森林資源を使い、遊び心を持つと同時に技術的なものを学ぶといったことを通して森林とのつながりがあればよいのではないか。最近、林業女子が増えているが、林業に固定されており、建築などその先につながっていない。そういったことも含めて、女性が関わる入り口が増やせられればよいのではないか。

委員：簡単に関わられるものをたくさん用意するということは大事なのではないか。消費者ではなく、共同生産者という発想で考えることが増えており、それが成功要因となっている。つくり手側にどんどんと引き込んでいくと広がりが生まれ、ムーブメントになるのではないか。

座長：街の人、やまの人の立場が入れ替わるという形を含めて、抽象論ではなく具体的な入り口をつくっていくという提案が出された。また、多彩な切り口から情報があることで全体像が見えるといったような情報の収集・整理、提供が必要ではないかといった提案が出された。これらを骨格素案に入れ込んで、今回は実際にやまの現場からの視点を踏まえてまとめに入りたい。

(8) 事務連絡

次回は、10月24日（木）13時から開催。

閉会

以上